

# グリーン四国

No.1272  
2026年  
3月号

## 「令和7年度 市町村林務担当者向け研修会」へ参加

【詳細は2頁】



「四国の山 写真・動画コンテスト」 「四国の山々の風景」部門：入選\_山を彩る春の競演

### 目次

- ・「令和7年度 市町村林務担当者向け研修会」へ参加 2
- ・対話型企业説明会 in 嶺北高校に参加 3
- ・コンテナ苗生産現場を見学 3
- ・土佐塩の道整備体験2026に協力 5
- ・木材利用に係る勉強会を開催 6
- ・嶺北林業振興事務所主催  
森林経営管理システムワーキンググループに参加 7
- ・宿毛小学校で「森林の大切な働き×防災とのつながり」について体験学習 8
- ・保護林管理委員会の開催 9
- ・オーテピア企画展「未来へつなぐ森林の力」 10



四国山の日

四国森林管理局

高知市丸ノ内1丁目3-30

T E L 088-821-2052  
H P <https://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>  
E-mail [shikoku\\_soumu@maff.go.jp](mailto:shikoku_soumu@maff.go.jp)

# 「令和7年度 市町村林務担当者向け研修会」へ参加

〈嶺北森林管理署〉

2月5日、高知県吾川郡越知町において、高知県中央西林業事務所が主催する「令和7年度市町村林務担当者向け研修会」が開催され、市町村職員4名、事業体職員4名、高知県職員8名、当署職員3名の計19名が参加しました。

研修会場となった民有林は、令和4年度に10年間の経営管理権集積計画を策定した森林の一部です。かつては谷から流れる水を利用した田畑として利用されていた場所もあり、植林が行われたものの、林業としては十分に活用されず、手入れが行われないまま放置されてきた区域も含まれた森林となっています。また、対岸には「スノーピークおち仁淀川キャンプフィールド」が開設されており、周辺には映画「竜とそばかすの姫」の舞台となった浅尾の沈下橋も位置することから、多くの利用者が訪れる地域となっています。本研修会は、水源かん養機能の向上や景観の保全も目的とした天然林へと誘導すること、そして利用可能な材の搬出方法を

検討することを目的として開催されました。午前中は、越知町役場会議室にて、越知町担当者より現地の概要やこれまでの施業内容について説明がありました。



担当者より概要説明の様子

令和4年度の列状間伐時には、既設作業道の幅員が狭く拡幅も困難であることから、伐倒木を林内に存置しており、再度伐採を行う際には、天然木の母樹を活かした天然更新を促すためにも木材の搬出が必要であるとの

考え方が示されましたが、既設作業道の改良の難しさに加え、1級河川の仁淀川を架線横断することも困難であるため、搬出方法が大きな課題となっています。

参加者からは、「コストはかかるが、作業道を新設し、架線と併用してタワーヤード等を使えば搬出は可能ではないか。」といった意見が出されました。また、当署からは「伐倒木が搬出できないなら、適度な長さに切り、切株などを利用し、横に置くことで表土流出の抑制や土



現地の様子（令和4年度 列状間伐）

留め効果が期待でき、下木の更新にもつながるのではないかと。」との提案を行うなど、非常に有意義な意見交換が行われました。

午後は、現地において、既設作業道の状況や列状間伐の跡地を視察しました。

林内を歩きながら、地形にあった作業道の作設方法や今後の施業方針についての検討を行いました。

当署では、例年この研修会に参加しており、今後も引き続き、意見交換の場へ積極的に参加するとともに、民有林の森林整備が進むよう、高知県や市町村への情報提供および技術的支援を行ってまいります。



現地確認の様子

## 対話型企業説明会 in 嶺北高校に参加

〈嶺北森林管理署〉

12月22日、高知県立嶺北高等学校で開催された「対話型企業説明会」に、嶺北森林管理署も参加しました。この説明会は、従来の「情報を伝えるだけのキャリア教育」から一歩進み、生徒が主体的に参加し、社会人と一緒に課題解決を考える「共創型キャリア教育」への転換を目指して企画されたものです。

当日は、嶺北高校の1・2年生73名が参加。企業説明（20分×3回）と、社会人との対話（15分×2回）を組み合わせたプログラムで進行了ました。参加企業は、役場、警察、消防署、塗装業、製造業、観光、通信、小売、サービス、建設、ソフトウェア、放送局など、地元を中心とした17業種。各ブースで、企業の魅力や特色、将来の展望について紹介しました。

嶺北森林管理署のブースでは、同校卒業生が説明を担当しました。林野庁の組織や、嶺北森林管理署の仕事について、わかりやすく紹介し、最初に「林野庁を知っていますか？」という質問をしたところ、多くの生徒が

「知らない」と回答しました。森林や林業に関する学科がないためだと感じましたが、説明が進むにつれ、生徒たちはメモを取りながら、熱心に耳を傾け、終了後には「現場での業務において、野生動物（熊など）と遭遇する可能性はありますか?」、「デスクワークと外仕事の比率はどのくらいですか?」などの積極的な質問も寄せられました。予想以上に興味を持ってもらえたことが、とても嬉しかったです。



社会人との対話では、「あなたが思う失敗とは?」「失敗からどう立ち直る?」など、生徒の質問に社会人が実体験を交えて答える場面もあり、活発な意見交換が行われました。

今回の説明会は、生徒の皆さんにとって、将来の進路や「どんな大人になりたいか」を考える良いきっかけになったと感じます。私たちも、こうした機会を通じて、地域の若い世代と関わることの大切さを改めて実感しました。

## コンテナ苗生産現場を見学

〈高知中部森林管理署〉

12月24日、苗木に対する知識の向上を目的に、造林事業で利用しているコンテナ苗の生産現場へ、若手職員を中心とする当署職員6名で見学に行きました。現在国有林で植栽されているスギ・ヒノキはコンテナ苗ですが、コンテナから抜いて袋詰めされた状態で現場到着。苗木検査するので、どのように育苗されているかを見る機会はありません。

かつて、国有林では直営で苗木（スギ・ヒノキ等の苗を育てるための畑や施設）を管理しており、植栽する苗木の一部を自分たちで育てていましたが、苗木事業が廃止されて以降、苗木生産現場に触れる機会が減っています。

そこで、高知県下の山林種苗の共同販売と生産指導を実施している高知県種苗緑化協同組合（香美市土佐山田町）の「コンテナ苗木生産現場で「育苗や管理方法」、「どのように植栽すれば成長がよいのか」、「獣害対策としての大苗の活用」等について伺いました。

同組合の担当者及び生産者の



コンテナ苗生産現場

方から「根鉢の表面に出ている白い根は、植栽しても主根にはならない。根の成長を促すのであれば、根鉢の下部に切り込みを十字に入れた方がよい。」「スギとヒノキで肥料の効き方に差がある。」「高温対策として8月に種まきを行い、9月にコンテナへ移植している。」等を教えていただきました。

また、近年問題となっている二ホンジカやノウサギによる獣害対策として大苗の活用を計画しており、大苗の生産体制についても話を伺いました。四国局の場合、スギの普通コンテナ苗は苗高35cm以上で根元径40mm以上ですが、大苗は苗高80cm以上で根元径7.5mm以上です。使用するコンテナも普通苗は150ccですが、大苗は300ccと倍になります。



一番左スギ大苗、右普通苗（1マス20cm）

一般的には、植栽する苗木が大きいほど、主軸の噛み切りなどの深刻な獣害被害に遭うリスクを減らせられる有効な対策の一つとされています。



コンテナ苗育苗



資材運搬大型ドローン

コンテナ大苗は1本当たりの重量約340g（1.5千本/ha植付で510kg）あり、人力運搬が主の植栽地では、運搬に難がありました。近年植栽箇所では、大型ドローンで運搬する等、省力化も進んでいます。

今回の見学会を通して、若手職員から「種まきから2年目と3年目のコンテナ苗を見比べ、1年で成長する速さに驚いた。」「苗が大きくなるほど、作業負担・時間・スペースがかかり、大苗を育てることの大変さも知ることができた。」などの感想がありました。

当署ではこれからも各種勉強会を開催し、現場業務に必要な知識の習熟に努め、国有林野事に活かしていきます。



資材運搬大型ドローン苗木運搬中

## 土佐塩の道整備体験 2026に協力

〈高知中部森林管理署〉

1月17日、「土佐塩の道整備体験2026イベント」（こうち山の日推進事業）が高知県香美市物部町において開催されました。

400年ほど昔より香南市赤岡から香美市物部町までの約30キロを結び、塩をはじめ生活物資が運ばれていた塩の道。時代の変遷と共に廃れていたこの道が、2002年に地元の有志によって再生され、様々なイベントが開かれ多くの人に歩かれています。

しかし、近年の過疎・高齢化により、塩の道の維持修繕や活動の継続が難しくなってきたことから、「土佐塩の道保存会」では、塩の道の歴史と保存会の活動を知ってもらい、塩の道のコース整備を通して森林資源を守り、ともに作業に汗を流すことで、交流入口と関係人口を創出し、塩の道の維持と地域活性化につなげることを目的として、2024年度より整備体験を通して保存会活動に対する応援を募っているところです。

高知中部森林管理署も土佐塩の道保存会をはじめ地域の活動には機会あるごとに協力をしているところですが、今回、保存会より、一般参加者に対して物部の山々についての講話を願っていたという依頼があったことから、国有林の紹介や物部町を囲む山々の魅力、二ホンシカ被害の状況、また、山道や登山道、塩の道との関わりなどについてお話をし、整備活動にも協力させていただきました。

当日は20名の募集を上回り、香美市や香南市、高知市や県外から30名の一般参加者があり、保存会、スタツフ合わせて60人が物部町大栃にある「奥物部ふるさと物産館」に集まり、土佐塩の道保存会の活動紹介に続いて当署職員より「物部の山を訪ねて」というテーマで講話を行いました。講話の後、お互いの自己紹介や意見交換などで、交流を深め、整備作業へ向かいました。



開始前に全員で山の神へ安全祈願を行ったあと、3班に分かれて塩の道の現場へ入り、コース上に崩れ落ちてきた土砂や落石、スギの枝葉などをツルハシや熊手を使い分けながら取り除き、今回計画していた3キロあまりのコースが整備されました。

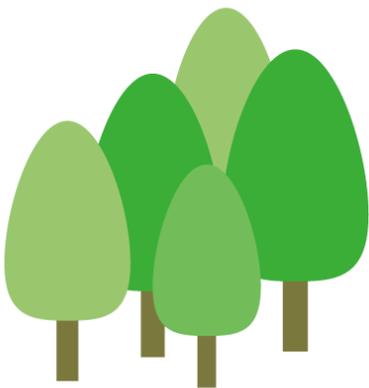
コース上のところどころにある馬頭観音や丁石などの史跡のガイドもあり、1月とは思えない暖かな天気にも恵まれ、心地よい汗をかきながらあつという間にタイムリミットを迎え、ゴール地点の庄谷相地区に到着しました。

庄谷相では保存会が用意してくれた香美市で捕獲した二ホンシカのBBQとイノシシ汁をいただき、参加者は「害獣として扱われていても、こうして命をいただいているんやねえ。」と山の動物に思いを寄せながら互いが交流を深め、山の恵みや森林のありがたさを体感していました。

また、長年塩の道保全活動に協力されている陸上自衛隊高知駐屯地の方から、日頃の取組の紹介や、多発・激甚化する自然災害に備えた支援の訓練で塩の道が活用されていることも報告されていました。

最後に保存会顧問の公文さんより、塩の道を守り次の世代へ継承し山間地域を元気にする意義と、物部から県境を越えて徳島県祖谷までつながっていた塩の道を再興させ整備をしていきたいという今後の展望についてのお話がありました。

2024年に祖谷に通じる塩の道が国有林内を通ることからルートとの調査と確定に協力した経緯もあり（グリーン四国2024年7月号）、今後とも地域の皆様と連携して国有林の技術や知識、マンパワーなどで地域に貢献していきたいと考えます。



## 木材利用に係る勉強会を開催

（四万十森林管理署）

1月23日に、四万十森林管理署の若手職員を中心として、「木材利用に係る勉強会」を開催しました。

国有林の職員にとって、製材所や建築現場を見学する機会はそれほど多くありません。そこで、①原木市場で購入された丸太が、どのように製材されるのか、②製材された製品が、建築用材として、どこに使用されるのかを確認するための勉強会を開催することとしました。

まず始めに、建築用材における各部材の名称や木取りに関する知識について、四万十森林管理署長より座学で学びました。

その後、佐竹木材（有）に移動し、製材所の見学を行いました。佐竹木材（有）は、高知県四万十市で昭和の時代から製材所を営んでおり、ヒノキ役物を中心に取り扱っています。工場内を見学させていただいたところ、節のない製品が大半を占めていました。節のない製品は昔から希少価値の高い高級材として扱われており、佐竹木材（有）がいかにブランド力を重要視しているのかが伺えました。

また、製材については、シングルハンドソーを用いて、丸太を一面ずつ挽いていき、木目や色、節が出るかどうか等を確認しながら、どのように木取りするかを瞬時に判断していました。購入した丸太一本の値段に対して、製材した製品価格でどれだ



け利益が出せるのか、実際に電卓を叩きながら、口頭にてご説明をいただきました。その他、普通の規格とは異なる製品の用途や各製品のおおよその価格など、普段は聞くことのできない貴重なお話を伺うことができました。



その後、「宿泊体験型モデルハウス 四万十ヒノキの家」（以下、「四万十ヒノキの家」という。）の施設見学を行いました。「四万十ヒノキの家」は、地産木材の良さを広くPRし、木材需要の拡大を図るとともに、地域の林業と木材産業の活性化を目指すことを目的として、平成23年に建築されています。四万十森林管理署長より事前に説明を受けた建築用材の各部材が、実際にどこに使用されているのか、自分の目で見て確認しながら、木材利用に関する理解を深めました。

今回の勉強会を通じて、川上だけでなく、川中から川下まで、広い視野で物事を捉えることの重要性を再認識するとともに、木取りの方法についても学ぶことができました。今回の経験を採材指導といった実務面においても、役立てていきたいと思えます。



## 嶺北林業振興事務所主催 森林経営管理システムワーキンググループに参加

〈嶺北森林管理署〉

2月12日、高知県嶺北林業振興事務所が主催する森林経営管理システムのワーキンググループに、オプザーバーとして参加しました。

当日は、嶺北林業振興事務所が管轄する4市町村、(一社)もとみず基金、高知県関係課から計26名が出席し、地域の森林経営の将来を見据えた、活発な意見交換が行われました。

ワーキングではまず、各市町村より意向調査の進捗状況、これまでの取組内容、今後の予定が報告され、各市町村が地域の森林課題に向き合いながら取組を進めている様子が共有されました。

続いて高知県担当課からは、県全体の森林経営管理制度の現状、分かりやすい意向調査様式の紹介、森林環境譲与税の活用ポイントなどについて説明がありました。

特に、意向調査では委託希望の回答の中に「あっせん等」を求める声も寄せられており、高知県としてもこうした現場のニーズに即した新たな制度設計

を急ぐ必要があるとの認識が示され、会場の関心が高まりました。

当署からは、森林の集積・集約化事業における役割として、協議会への参画を通じた情報共有や技術的支援を継続して行うことを説明しました。また国有林と隣接する区域では、林道・作業道の相互利用や作業調整など、連携することにより地域全体の森林整備がより効率化できるため、気軽に相談してほしい旨を呼びかけました。



今回のワーキンググループを通じ、4月から施行される改正森林経営管理制度を円滑に運用していくためには、国有林が地域と一体となつて技術的支援を行うことがこれまで以上に重要であると改めて感じました。

今後も、地域の森林が持つ価値を最大限に引き出し、将来に引き継いでいくため、関係機関と緊密に連携しながら取り組みを進めていきたいと思えます。



# 宿毛小学校で「森林の大切な働き×防災とのつながり」

## について体験学習

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

### ○概要

宿毛市立宿毛小学校から、総合的な学習時間の防災学習の一環として、「水の土壌浸透実験を指導して欲しい。」との要請があり、1月20日、四年生65名を対象に体験学習を行いました。

### ○座学（防災学習）

最初に座学（防災学習）を行いました。まず、自然界の水の行方として、水は水面や地面などから蒸発し、水蒸気となって身の回りに存在したり、雲や霧となって存在したり、時には雨となつて地上に降つてきたりする水の循環について説明しました。

次に、日本の山は急で、河川も傾斜がきつく距離が短いため、大雨が降ると山から海へ一気に流下し、大規模な洪水が発生することがあります。このため、良い森林をつくったり、ダムをつくつたりして、水の量を調整することが重要なこと、森林は、土砂の流出を防ぐこと、樹木の根が山くずれを少なくすること、土が水を吸収し地下水となつて川の水量を調整すること、それらの働きは、木を植えたままに

せず、人が間伐などの手入れ（森林整備）をしつかりして、良い森林を作ること、發揮されることについて、スライドを見せながら説明しました。

### ○水の土壌浸透実験

次に校庭で水の土壌浸透実験を行いました。座学を踏まえつつ、実験を通して理解を深めてもらうため、「木のある山」と「木のない山」を再現した模型により行いました。

「木のある山」の模型は、一層目は枯れ葉等（A0（ゼロ）層）、二層目は腐葉土（A層）、三層目は、林道沿いに見える切



座学（防災学習）の様子

通しの斜面（B・C層）として、森林の土壌を再現したもので、「木のない山」は、小学校の運動場の土を使用し、荒廃地を再現したものです。

実験に先立ち解説パネルと大きなスポンジを使い、森林の土には葉っぱが積もつて小さな隙間がたくさんあること、降った雨を沢山吸収すること、また、フィルターの役割を果たすので、雨水がろ過され、きれいな水となることを説明しました。

その後、模型にジョウロに入れた水を雨水に見立てて降らせ、時間の経過による変化を調べました。観察を進めて行くと、荒廃地を再現した「木のない山」は、早い段階で土砂が流され、斜面に置いた模型の家や車は流れこそしませんでした。これに対し、「木のある山」は、森林に見立てた木々の模型、敷き詰めた落ち葉や腐葉土がクッションとなり、土の浸食を防ぎ雨水を蓄え、時間が経過しても見た目の変化が起こりませんでした。また、地下水になつた量を計測したとこ

ろ、「木のある山」の方が「木のない山」より量が多いことや、降らした水と出た水の差を計測した結果、より多くの水が貯留されていることがわかりました。

### ○学習のふりかえり

座学（防災学習）や実験を通して得られた結果を各自ワーク



水の土壌浸透実験の様子

シートに記録し、まとめとして数名に発表してもらいました。近年頻発する集中豪雨等自然災害に対し、森林の山地災害防止機能には限界はあるものの、「森林の大切な働き×防災とのつながり」について理解が深まったと考えます。

○おわりに

後日、学校より教職員アンケートと児童の感想文の送付があり、「実験装置に驚いた。実験が楽しかった。」「森林についてすごいがやね、座学と実験で防災とのかかわりを学べて良かった。理科の勉強とのつながりがあった。」など児童の感想は様々でしたが、学校からは「とてもみんなが集中して、楽しそうに学ぶ姿が見られて良かった。」「四年生は理科で、雨水の行方について学習するので、土の粒の大きさによるしみこみ具合の違い等と関連のあるものを取り扱って頂けると嬉しい。」との今後の教室に向けての回答もありました。

当センターでは、学校等の要請も踏まえつつ、教科書ともリンクした形で実践できる森林環境教育を推進していきます。

## 保護林管理委員会の開催

〈局 計画課〉

今年度実施した保護林及び緑の回廊のモニタリング調査結果を報告し、生物多様性保全に向けた保護林等の管理方針について審議するため、2月9日に保護林管理委員会を開催しました。



「保護林」は大正4年（1915年）に創設された制度で、原生的な天然林や希少な動植物の生息地など、特に保護が必要な国有林野を指定するものです。

また「緑の回廊」は、保護林同士をつなぐなどとして、野生動物の移動経路を確保することで森林生態系ネットワークを形成することを目的として設定しています。

委員会では、石鎚山地区のブナ保全を目的とする小田深山の保護林、魚梁瀬地区のヤナセスギ等の保全を目的とする千本山・雁巻山の保護林などについて、森林の生育状況、センサー



保護林内のヤナセスギ



緑の回廊で確認されたツキノワグマ

カメラによる動物の確認状況、鳥類・希少植物の調査結果等を報告しました。これらを踏まえ、保護林や緑の回廊内での二ホンジカによる下層植生や希少植物への食害、その対策などについて活発な議論が行われました。

また、四国では絶滅の危機にあるツキノワグマについては、緑の回廊調査により3個体が確認されたほか、希少な鳥類や植物の生育も確認され、保護林等が貴重な動植物の生息・生育地として機能していることが改めて示されました。当局では、引き続き、貴重な野生動植物の保全と森林生態系の維持に向け、保護林及び緑の回廊の適切な保全・管理に取り組んでいきます。

# 「未来へつなぐ森林の力」



森林の機能・役割の理解促進のための



場所

オーテピア高知図書館

高知市追手筋2-1-1

開館日

火～金 9:00～20:00

土・日・祝 9:00～18:00

(期間中休館日…毎週月曜日)

## パネル展示

開催期間

令和8年

3月27日(金)～4月7日(火)

開催場所

1階休憩コーナー

内容

身近な地域の森林で営まれる森づくりや木材活用の取組に改めて目を向けていただけるよう、わかりやすく紹介します。

もり

## 森林の本だな

開催期間

令和8年

3月18日(水)～3月29日(日)

開催場所

2階総合カウンター前  
展示スペースB

内容

オーテピア所蔵の森林や木に関する絵本・書籍をご紹介します。

連携事業

ライブラリーコンサート

## 「森の音楽会」～ヤナセスギの響き～

高知県の銘木「魚梁瀬杉」で作られたヴァイオリンを、目代美和さんに演奏していただきます。北村真実さんのピアノと共に、あたたかい高知の音色をお楽しみください♪



ヴァイオリン：目代 美和



ピアノ：北村 真実

開催日

令和8年

3月29日(日) 14:00～15:00

開催場所

オーテピア高知図書館2階  
こどもコーナー内 こども読書コーナー

対象

こどもとその保護者 ほか

主催

NPO法人こうち音の文化振興会  
オーテピア高知図書館

観覧無料  
・  
申込不要